

《補足説明》

◎ 発表者 濱紀子先生

本日の発表に際して昨年から二人で研究を始め、何をやるかという所から始まったのですが、いざ始まってみると話は弾むが進まない、ということが多々ありました。また生徒と話をしていても「全然聞いてなかった。」「先生が言ってくれてなかった。」などの声を聞くことがとても多く、なぜこんなに聞けなくなったのか、という所が私達の研究の出発点だったと思います。「聞くこと」についての教材を探す段階で、今日紹介した『中学校国語科・聞く力の評価と指導』も絶版で、ヤフーオークションで手に入れたというぐらい非常に本も少なく、あくまで「聞く力」がついているものとして高校の国語教育がスタートするようになっていいるのかなあ、と思いました。しかし、それと実際に目の前にいる生徒とのギャップとを考えると、やはり出ていないものは、一回歩みを戻して、そこからスタートするべきではないか、と私達は考えてきました。

本日の資料は、パワーポイントの資料がたくさんあり、飛ばし飛ばしの発表になり、先生方にとっては聞きづらい点多々あったと思いますが、発表が終わってから後で読んでいただいてわかるように書き、まとめつもりです。これが果たしてどれくらいのものなのか、本当に出発点という段階で、やはりここから段階的に積み木を積み上げていくようにやっていかないと力はずかかないのではないかと一年半研究をしてきて改めて実感している所です。そし

て「主体的・対話的で深い学びの実現を目指して」というタイトルに関しても、どこがそうなのかと、とても難しいのですが、ただ「アクティブラーニング」という言葉を使うと「生徒が動き回っていないといけない。」「それはアクティブではない。」と捉えがちな私達ではあります。改めて二人で研究を進める中で、とても静かに聞いていても、子供達が思考を巡らしている様子や考えを深めている様子が、観察やワークシートの記入からも伺えました。静かな中にある「主体的な学び」ということを、「聞く力」の活動を通じて知り得たのではないか、と思っています。

◎発表者 宮城久子先生

スマートフォン等で必要な情報は手軽に手に入るという生徒達なのですが、自分から何か求めていたり調べたりするのは苦手だな、と感じる場面はたくさんあります。社会に出てから、人の話を聞くとか相手の状況を読み取ることが非常に重要だ、という話をしました。その中で、「電話の受け答えや留守番電話の内容を把握すること等、「聞く力」を補う場面が必要であると考えて、いろいろな場面で実践を行ってきました。ご感想をお聞かせしてください。

≪質疑応答≫

◎阿部真弓先生（徳島市立高校）

発表とても面白く聞きました。ありがとうございました。普段「聞く力」をつけたいと思っても、なかなか授業の中

の実践で取り組めていない分野だったので、とても興味深く聞きました。二点教えていただきたいことがあるのですが、使用教材として『中学校国語科・聞く力の評価と指導』という本を使われたようですが、実践の中で二つの教材を使ったとお話されていたと思います。『中学校国語科・聞く力の評価と指導』に関しては生徒の現状維持のために使われて、そしてその後、オリジナル教材の方へいったのか、『中学校国語科・聞く力の評価と指導』の教材の位置づけを教えていただきたいと思います。もう一点は「聞く力」の指導を実施したクラスと実施していないクラスがあるかと思いますが、実施したクラスと実施していないクラスの違いを実感されることがあれば教えていただきたいと思います。また実施したクラスでは、授業後に声かけが変わったとか、例えば講演の時にメモを取るように声かけをするようになったとか、何か変化がありましたら教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

◎濱紀子先生

『中学校国語科・聞く力の評価と指導』を選んだきっかけは、高校の「聞く力」を高める論文を探し、その論文の中の参考資料にあったことがきっかけです。『中学国語科』とあるので、実際にこれを使ってみて、ワークシートでどれくらい聞き取れるのかという所を計りたいと思ったのが一番最初でした。最初の頁から進んで段階を追ってやっていくことになりました。ただこれは投げ入れの教材になり

ますので、頻繁に授業の中で取り入れることが難しく、各学期に一、二回取り入れればいいかなあ、という程度でした。この教材の中の「評価テスト」がとてもよく出来ており、これをモデルに自分達のオリジナルテストを作成して使い、扱う問題は環境問題に特化したものにしようということになり、二人で新聞記事を集めて教材を作っているのが現段階です。今年も一年生については『中学校国語科・聞く力の評価と指導』を使い、一年生後半から二年生にかけてはオリジナル教材を使っています。基礎的な力を測るという意味で『中学校国語科・聞く力の評価と指導』を使わせていただいています。

二点目の質問に関しては、「聞く活動から他の活動からの広がり」ということで、一年生のクラスで二つの評論文を比較するという取組をしましたが、これは「聞く力」のテストを三回実施したクラスで行いました。「聞く力」の実践を行ったクラスの良い所は、教室が非常に静かになる所です。集中して聞かないと聞き取れないので静かになり、静かになると教師の発問や手順がじっくり聞き取れ、静かな中での授業が当たり前になります。その結果、とても集中力が増し、その後の話し合い活動もとても活発になってきます。生徒は面白いとどんどん活動していくので、それが相乗効果で進んでいったという所があるかと思えます。やっているクラスの生徒の中には、いわゆる英数クラスと普通クラスがあったのですが、特に普通クラスで取り組んだクラスの生徒については、力がつき、二年生に上がる時

には英数クラスに進んだ生徒も多かったです。今日の資料で紹介したワークシートの中で、紹介した生徒もそうだったのですが、本当に力がついたと実感しています。

◎宮城久子先生

生徒個人個人の力に気づけることが大きくて、それぞれがどんな風にメモを取っているかとか、どんな問題でつまづいているかということも確認できたので、この点もその後の声かけなどに繋がったと感じています。またレジュメの七頁に今後の学習の予定ということで段階的に深めていきたいということを示しています。聞くことは、学年のどの段階からでも出来ますので、生徒の状況に合わせて簡単な所から少しずつ「聞く」という場面を作っていくと非常に生活面でも役立つと思います。

◎三井敏之教頭先生（小松島西高校）

レジュメ五頁の仮説として出した「こういう力が付くのではないか」が、実際にどのような結果として身に付いたとお考えなのかを教えていただければと思います。

◎濱紀子先生

研究の仮説の所ですが、学習面での効果としては、聞く体験を増やすことで、子供達自身も役に立ったという自己アンケートの結果も出ました。意識的に聞く活動を取り入れることで、「これは役に立っている」という実感を生徒

が持っていたり、聞き取れなかった所が聞き取れるようになっていたりありますので、それぞれ個々の生徒によって付いた力に差はあれども、ある程度に身についたのではないかと考えています。ただ二つ目の印の所の「社会人としての必要な力」までは、なかなか難しかったです。例えば留守番電話の聞き取りです。結局、それぞれが個別に携帯電話を持つような時代になり、電話がなくなり、家の電話を家族の誰かに取り次ぐという生活体験がない中で、やはり電話の受け答えだったり、それをしっかりと聞き取ったりということが、とても難しく、社会人になれば会社で電話を使うのにな、と二人で言いながら、やはりそこまでの活動をして力を付けていくという所までは難しかったと思います。また心理面での効果の所では、まだまだこれくらい活動では、とても、ここまで落ち着くようになりませんでした、という効果を先生方に披露できる所までいっております。けれども、言葉で自分の感情を説明できるということが、やはり人と付き合う上でも、自分の思いを相手に伝える上でも、とても大事だと思うので、そういった効果が現れるように、今後も活動を続けて行きたいと思えます。

◎泉始位先生（城南高校）

確かに興味深く聞かせていただきました。「聞く力」というのは私達も忘れがち이었습니다。後、後に回してしまふ所ではないかと思つて、自分自身、今後の授業の中で

生徒に身に付けさせていかなければならないと思いましたが。先生方の実践は現代文の方ですが、例えば古典の授業の中で、「聞く力」を付けるとか、「聞く力」に注目して授業を展開するとか、そういうことを、もしお考えになっっているのであれば、お話を聞きたいと思って質問させていただきました。

◎宮城久子先生

ありがとうございます。古典の授業の中でということですが、音読したり、教師の模範的な読みを聞いたりする時に、ふりがなを振らせたりということは、普段から先生方もされていると思います。そういう中で声かけであったりとか、あるいはお互いに読み合うという作業をする時に「一緒に読みなさい。」とペアワークをさせてます。意外に一緒に読むということは、相手の声が出るのを予測して、「聞きながら読む」という形になるので、それぞれがお互いの声を聞いていないとバラバラなリズムで読むということが多々あります。私も授業の中で声をかけたり、指導をしている所ですが、一緒に読む時でも、聞き合うという作業は必ず必要になってきますので、そういう場面で気をつけてやっております。そこから暗唱に繋がったり、読解に繋がったりという形になっていくかな、と考えております。

◎泉始位先生（城南高校）

それに関連して源氏物語の説明をする時に瀬戸内寂聴さ

んが、源氏物語の成立についていろいろ解説をしている音源があります。例えばそれを生徒に聞かせて、先程のCDの聞き取りではないのですが、段階に分けて聞き取らうとか、そういう所にも利用できるのではないかと考えております。ありがとうございました。

◎多田晋太郎先生（池田高校）

発表、大変興味深く聞かせていただきました。質問というか私が聞き逃していた部分かもしれないのですが、聞くこと、リスニングといえは英語がとても進んでことをされていると思います。授業を準備している段階の中で、英語の先生方と何かお話をされたり、参考になることがあったりあるかなと思つて、お聞かせ願いたいと思つています。

◎濱紀子先生

ありがとうございます。英語の先生方が周りにおられますので、教材を探す時に「国語の聞く教材が本当でない。」といろいろと話をすることもありました。直接参考にというわけではないが、やはり来年度から、センター試験から共通テストに変わるにあたって、英語の場合は非常に「聞く力」が問われて来ると伺いました。しかし、英語を聞いてそれを日本語に直していく時には、国語の力が必要になってくるわけです。では、国語ではリスニングをしなくもいいのか、英語でやっているようなことをしなくていいのかというのを考えて、この本を手取るきっかけになった

わけです。本当に小学校、中学校の教材はあっても、国語の高校段階の教材はなく、やはり高校生は「聞く」ことはできるのが当たり前と見なされ、高校では進んでいっているんだな、ということを実感しました。英語の動きを横目で見ながら、どんなことをしているか、G T E Cの質問項目を見たりして、「いつどこで誰がどうした」とか「内容に合っているものを選べ」とかいう項目は、ワークシート作りの参考にさせていただきました。

《指導助言》

◎大栗直子先生（学校教育課・キャリア消費者教育担当）

お二人の先生方、研究発表、大変お世話になりました。本日発表いただいた二校は共に各学校の生徒の実態を踏まえて、目の前の生徒に必要な資質について考えて、そしてその育成を目指して創意工夫された言語活動を取り入れた授業を実践されていきました。日々のお忙しい教育活動の中、研究に取り組んでいただき、本当にありがとうございます。

それでは鳴門高校の濱先生と宮城先生の発表に関して、大変すばらしかった点を挙げたいと思います。まず一点目は、「聞く」ことに注目し、「聞く」活動を効果的に位置付けて、言語能力の育成を目指した授業を展開されているという点です。これまでの学習指導要録の中では教員の視点で「何を教えるか」という観点で組み立てられていましたが、新学習指導要領では、生徒の視点で捉え直し、「何ができるようになるか」「育成すべき資質能力は何か」と

いうことを指導事項として記しています。国語科においては、現行の学習指導要領にも指導すべき言語能力が明示されておりますが、その育成を目的にして授業を組み立てるといふよりも扱う教材や作品が優先させる「教材ありき」の授業となっていることが多い、というような指摘を受けてきました。今回の研究発表では、生徒の実態から実感として捉えた課題をもとに、アンケート調査でしっかりと分析をされた上で「聞くこと」を軸にした教材や言語活動を考え、生徒の言語能力の育成、向上を目的とした授業づくりを実践されています。従来から指摘されてきた課題を解決する資質・能力ベースの新学習指導要領に沿った授業実践であると思います。具体的に見ますと実践一（六頁）は、「聞く」活動を通して「聞く」力を客観的に捉えるという、聞くことに焦点化した実践です。一方、実践二（七頁）は、新聞の情報とラジオの情報を整理・分析して意見を書くという実践で、「書く」能力を育成するために「聞く」活動を効果的に取り入れています。このように話したり聞いたり書いたり読んだりする活動は言語活動は密接に関わっています。その関連の中で育成すべき資質能力にふさわしい効果的な言語活動を考えて設定するということが大切になってくると思います。

二点目は、生徒の学びが深まるように学習の過程を大事にして計画・実践し、そして次の取り組みへと繋げているという点です。先程も確認しましたが、実践一は聞くことに焦点化した実践です。会場の先生方からもご意見・感想

等がありました。が、国語科の授業の中では、リスニングテストは、馴染みがありませんので「聞く力」を客観的に評価することは、なかなか難しいと思われれます。そのような中で生徒自身が自分の「聞く力」を客観的に捉えることができる教材を用意し、そして聞くことに対する自覚を促しています。さらにこの実践を踏まえて、実践二や他の活動の広がりの実践のように、「聞く」以外の活動へと繋がる授業を計画的に位置付けています。段階を踏んで、生徒自身が学習の深まりを自覚できるような学習計画となっていく点ですばらしいと思います。ここで一点補足ですが、十頁の「聞く活動から他の活動への広がり」において、二つの評論文を比較して、それぞれの主張を整理するという活動が示されていますが、実はこれは昨年二月に濱先生が研究授業です。要請を受けて研究授業を見させていただきましたが、非常に活発に話し合いがされていました。先程の発表の中で三回「聞く活動」をされていたということも納得したのですが、実際に濱先生がしっかりと生徒の様子を見て、言葉を聞いていました。生徒の言葉をしっかりと拾って、それを返していらっしやった、そういった所で、学習活動と普段の教育活動がしっかりマッチされて生徒の力に繋がったのではないかと思っております。そういった結果は、生徒の事後アンケートに表れていると思います。十二頁に事後アンケートがあります。資質・能力を育成するために効果的な言語活動を位置付けて、その言語活動を有効だと実感している生徒が九割います。この九割という数字こ

そすばらしい成果であると思います。全体の考察の中で「国語の授業の中だけでも聴覚を刺激して『聞く』体験を増やすような言語活動をする」と書かれています。ぜひ、国語科の全てのクラスの中で実践していただいで、さらに学校全体の取組として、聞くことに対する自覚に繋がるような取組を広げていただければと思います。質問の中にもありました。講演を聞いた後、それをどういう形で聞いた内容を振り返らせるか、いろいろな形があると思います。書かせることが多いですが、誰かに伝えるという設定をして、しっかり聞かせる、というようなことに繋がっていただけたら、と思います。そうすることで、四、五頁に自分の「聞く力」についてアンケートを取っていましたが、「講演など大人数に向けて話されたことでも内容をつかめる」の数値が上がっていくのではないかと思っています。そして、こういった形で授業の外で言語活動の有効性を実感するということが深い学びに繋がっていくのだと思います。

言語活動にしまして、今年度から小学校中学校では国語力の向上ということで、全ての教科で言語活動の充実に向けて実践しています。「伝える内容を自ら考え、適切に表現する力」に課題があると言われています。言語活動をしっかりと各教科で位置付けて実践していく、それをぜひ高校の方でもその学びを繋げていただきたいと思っております。本日、発表いただいた二組は、本当にいろいろな言語活動を紹介していただきました。それを、目の前の生徒

に落とした形で、アレンジ、カスタマイズして、ぜひ実践
していただけたらと思っております。本日の発表、お疲れ
さまでした。ありがとうございました。